美術本特集

イラストレーションて言葉は日本にはなかったんだぜ

たばこと塩の博物館で十月二十二日まで開催されていた「和田誠と日本のイラストレーション」展に行ってきた。和田さんの仕事と交流を中心に、日本のイラストレーション史がコンパクトにまとめられたよい展示であった。

熱烈な和田ファンを自任しているが（本紙カットはもちろん和田さんの真似です）、原画をじっくりと見るのは今回が初めて。もはや伝説級の日宣美賞一等受賞作「夜のマルグリット」、無報酬で描き続けた新宿日活名画座のポスター、装丁・デザインをした書籍やレコードジャケットの数々、今年通算二〇〇〇作を超えた週刊文春表紙絵などの代表作をはじめ、幼き日の絵や高校時代の「先生の似顔絵による時間割」などの貴重な展示、アニメーション作品、制作風景の映像も興味深い。

そうそう、忘れてならないのは本博物館のテーマである「たばこ」。誰もが見覚えのある（嫌煙の今の世の中では無理かな？）ハイライトのパッケージデザインは和田さんだ。紫煙をくゆらせるハンフリー・ボガート、口から吸った煙を背中から噴き出すくじらなど、たばこにまつわる作品がまとめられたコーナーも楽しい。

宇野亜喜良、横尾忠則、安西水丸、湯村輝彦、矢吹申彦、南伸坊ら和田さんと交流・影響のあるイラストレーターの作品も時代の流れとともに紹介されている。平凡パンチ創刊号の大橋歩による表紙絵の原画が見られたのも感動もの。

イラストレーションという言葉は、彼らの活躍がなければ日本に根付かなかっただろう。その中心であり、現在もそうあり続ける和田誠。末永くお元気で。（沢）

中田図書新聞

主な記事から
- イラストレーションて〜
- 秋の夜長に
- 来年も行きたい！

超・初心者向けです

和田誠

東京国立博物館で運慶展が開催されています。「運慶」については東大寺の仁王像を作った人、教科書で読み知った知識しか私にはありません。仏像は見て美しいと思っても、普段は興味をもって観察しているわけではなく知識もありません。「運慶」とはどういう人であったのかと思い、手に取ったのが『マンガでわかる天才仏師！運慶』です。

仏像の特徴、造られた時代背景をマンガと共に初心者向けにまとめてあります。本の帯に記載されている通り、「運慶のことがやさしくわかる！30分で運慶の生涯、イッキ読み！」できます。歴史に興味をもつ一歩としてもお薦めの一冊です。（京）

制多迦童子

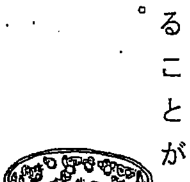
＊残念ながら本展の図録は書店流通なし。ここでは今年初めに復刊された『もう一度倫敦巴里』を挙げておきたい。パロディの神髄が味わえる名著だ。

国の宝は私の宝!!

京都国立博物館で開催されている国宝展に行ってきた。日本全国に散らばる国宝が一挙に集まるまたとない機会。お目当ては曜変天目茶碗。最高級の天目茶碗で外観は凛とした漆黒だが、内側を覗くと大小様々なキラキラと輝く斑紋が現れる。まるで星が輝いているよう。「欲しい」とつぶやいたら、千年働いても買えません、と周りに一笑された。仕方がないので『週刊ニッポンの国宝』四号（六三〇円！）を購入して写真を眺める毎日だ。

さて、美術品をテーマにした小説家といえば最近では原田マハが人気だが、二〇一五年に『神の値段』で「このミステリーがすごい！」大賞を受賞した一色さゆりも今後要注目の作家である。原田マハ同様、学芸員としても活躍している彼女。受賞作では現代アートのマーケット事情を題材にして、素人には立ち入ることのできない世界を見せてくれた。

そんな一色さゆりの新作が『嘘をつく器』である。再現不可能と言われている曜変天目を作り上げた陶芸家の死を巡るミステリー。さらりと読めて気軽にアートの世界に浸ることができる秀作だ。（斉）


曜変天目

名作は色あせない

先日、東京に行く機会があり「はいからさんが通る」原画展を見に美術館に行った。連載終了から今年で40年の節目の年で11月には新しく劇場版アニメにもなる名作だ。年月が経った今なお引き込まれるストーリー展開と画力に色あせない魅力を再認識させられた。

時は大正、ハイカラ娘の紅緒は突然伊集院少尉が婚約者だと聞かされる。じゃじゃ馬な紅緒を中心に騒動が巻き起こり、少尉が戦地に行ってしまったり、紅緒が出版社で働きだしたりと時代に翻弄されつつも負けないで生きていくラブコメディだ。

いつの時代もパワフルに生きる女性を、著者はどの作品も素敵に描いている。原画展では、同時に当時の女性達の洋服の展示や職業についての説明などもあり、実際の背景がよく分かるようになっていて大変見ごたえがあった。

40年以上も第一線でいられる事に毎回この中田図書新聞の原稿だけでも四苦八苦している身とすれば脱帽するしかないと思うのだ。（郁）

南野陽子

阿部寛

【書誌情報】『もう一度倫敦巴里』（和田誠・ナナロク社 2200円）『マンガでわかる天才仏師！運慶』（田中ひろみ・JTBパブリッシング 1400円）『嘘をつく器』（一色さゆり・宝島社 1380円）『はいからさんが通る①～⑧』（大和和紀・講談社各 500円）
※価格は本体価格です。

平成29年11月5日　中田図書新聞

美術本特集

秋の夜長に

クリムト"抱擁"を模写

秋になると、少し難しくてもいいから、読みごたえのある本を選んでしまう。私が手に取ったのは、『世紀末芸術』。最近オープンした富山県美術館でクリムトの作品を観た影響かもしれない。ずいぶん前に読んだ本だが、もう一度読み返したくなった。

本書を読むまで印象派以降の芸術家、例えばウィリアム・モリスやビアズリー、クリムトの位置づけがいまひとつわからなかった。しかし、この本を読むと、19世紀末に多種多様な芸術家が現れた背景がよくわかる。

はじめは未知の世界だった世紀末芸術の作品たちとの距離が、読後にはグッと近くなる。美術館に、会いに行きたくなった。

残念ながら、本書は現在品切れとなっている。しかし、同じ著者が、新書で『カラー版 近代絵画史（上下）』を出している。コンパクトながら、ロマン派・印象派・世紀末絵画・シュルレアリスム等、近代美術が一通り網羅されている。美術館へのお供にいかがだろうか。（園）

美術館に行きたい!!

『楽園のカンヴァス』『ジヴェルニーの食卓』『暗幕のゲルニカ』等アート小説で知られる小説家・原田マハさんの新書『いちまいの絵』。自身が強く影響を受けた絵画厳選26点より、画家の思い、制作の背景、そして自身の体験を綴っています。単なる絵画のガイドブックではありません。「下手くそパンチを思いっきり浴びた気分」の子ども時代のピカソとの出会いなど、自身の絵画にまつわるエピソードとともに記されており、著者と一緒に絵画を見て回っている気分になります。ああでも、やっぱり絵画は生で観たい!! この秋は美術館巡りの旅をしてみようかしら。

すべての道はアートに通ず

二〇〇八年に広島市の上空に飛行機雲で「ピカッ」という文字を書いたインスタレーション。渋谷にいるネズミを捕獲し、ピカチューのペインティングを施した作品。二〇一一年の福島第一原発事故直後に、渋谷駅構内の岡本太郎「明日への神話」の片隅に原発事故の絵をゲリラで付け加えた作品。最近では、トランプ大統領就任直後にメキシコ側のアメリカとの国境沿いにツリーハウスを建設したプロジェクト等々。一貫して都市や社会に対し介入する作品を発表し続けている東京で結成された六人組のアート集団「Chim→Pom（チン→ポム）」。『都市は人なり』は、歌舞伎町の取り壊し直前の振興組合ビルで行われた展覧会及びイベント「また明日も観てくれるかな？」から、高円寺のキタコレビルの地下に歌舞伎町のビルの瓦礫を埋め、建築家・周防貴之との協働により、その上に道（公共圏）を通すまでの一連の活動「Sukurappu ando Birudo プロジェクト」の全記録です。

ビルバーガーができるまで

Chim↑Pom

二〇二〇年の東京オリンピック開催に向けて急速に再開発が進む中、ストリート発で作品を発表してきた彼らが今の東京を記録として残しながら、行政主導ではなくDIYで「道」という公共圏に関わる作品をつくったと言うアイデアには脱帽させられました。この「道」は今後も常設されるそうなので、オリンピック開催時にはどのような状態になっているのか楽しみです。（岩）

BIGな愛

のせ猫ファミリーのベストショットたっぷりの写真集がBIGになって発売されました。ダイナミックに、そして繊細に野菜を頭の上に乗せられる写真には根っからの犬派の私もメロメロです。芸術的な乗せっぷりとのせ猫たちの表情とのギャップがたまりません。この乗せっぷりは愛

です。生来の気性もあると思いますが、飼い主さんとの信頼関係がないとこんなに穏やかで心和む写真は撮れないでしょう。

来年は戌年。年賀状に我が家の愛犬の可愛すぎる写真を！と日々ベストショットを狙っていますが、こんな芸術的な写真は撮れません。愛情では負けないと思うのですが…。（野）

本気すぎるヤツら

卒業生の半数が行方不明になる。まるでホラーか都市伝説のような大学、それが東京藝大である。『最後の秘境東京藝大』は、そんな藝大に通う奥様を持つ小説家が、藝大を案内してくれる。

まず入学するところからドラマがある。高校時代に、答案用紙においしいカレーの作り方を書いて東大に合格した猛者の噂を耳にしたが、藝大の試験と採点はもはやその次元にはない。どんな試験かはぜひ読んでみてほしい。

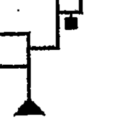
入学してからも、彫刻する前に道具を作るなど、とにかく彼らは本気である。人間はこんなにも好きなことに本気になれるのか。何だか愛おしくなってくる一冊。（大）

「分かる」楽しみ

ピタゴラスイッチでお馴染みの佐藤雅彦さんの新刊『新しい分かり方』。「分かって腑に落ちる」こともあれば「分かるけど、なぜ？」や「分からない。どうしてだ？」（これを「新しい分からない方」と呼ぶ）など、頭の中がぐるぐる二転三転する感覚に捉われます。

最大の特徴は「分かる」の伝え方。イラストや写真が多く用いられており、それらの作品を楽しみながらゲーム感覚で読み進めることで、今までにない読書体験ができる一冊です。

さて、私は皆様に本書を読んで感じた「分かり方」をお伝えすることができたでしょうか。興味のある方は是非、ご一読をオススメします。（み）



【書誌情報】『カラー版　近代絵画史（上・下）』（高階秀爾・中央公論新社上 840円下 860円）『いちまいの絵』（原田マハ・集英社新書 900円）『都市は人なり』（Chim↑Pom・LIXIL出版 2800円）『最後の秘境東京藝大』（二宮敦人・新潮社 1400円）『新しい分かり方』（佐藤雅彦・中央公論新社 1900円）『のせ猫・BIG』（SHIRONEKO・宝島社 800円）

※価格は本体価格です。

平成29年11月5日　中田図書新聞

大人のためのアート本

魔法の本、POP－UP！

仕掛け絵本というとなんとなく子供向けの商品というイメージが先行しますが、大日本絵画の『不思議の国のアリス』に出会ったときはあまりの素晴らしさと驚きとで大興奮したのを覚えています。

作者はロバート・サブダ、またの名を紙の魔術師。魔術師の名にふさわしく、彼の作る仕掛け絵本は繊細で精巧であり、かつ大胆。書籍という平面に生み出された紙の立体芸術です。トランプが宙を舞うページがまさしくそう。ページの隅にある小さな仕掛けも手が込んでいて飽きさせません。

「アリス」以外の世界の名作やクリスマスをテーマにした作品も出版されていますが、残念ながら海外生産のため、品薄・品切が続いています。

どこかで彼の本に出会えたら、そっと優しく開いてみてください。ページをめくるたびに、紙とはさみが作り上げた芸術があなたの目の前に現れます。(藤)

大人の絵本です

「せかいいちのねこ」の続編『いらないねこ』。「いらないねこ」なんて、タイトルだけで切ないわ～と思いながら読み始めました。物語は主人公であるぬいぐるみのニャンコが捨てられていた子猫を拾い、まわりの生き物たちに助けられながら奮闘し育てるという心温まるストーリーです。

物語もほっこりするのですがヒグチユウコさんの絵がまたいい！猫たちはスタイリッシュな服装でしっかりした顔立ちなのですが、主人公のぬいぐるみのニャンコは文字通りぬいぐるみなので他の猫たちとはまた違うタッチで描かれとても愛らしい姿をしています。他にも幻想的な生き物たちが登場して楽しませてくれます。本書の付録にクリアファイルが封入されていましたがもったいなくて使えそうもない私です。(沼)

ぬらない大人のぬり絵

単に色塗りを楽しむだけでなく、パズルになっていたり、名所を知ることができたり、自律神経を整えたり…。「おとなの塗り絵」は楽しみ方が盛りだくさんで、お店の人気商品です。しかし、何色をぬれば綺麗になるのか不安に思う方もいらっしゃるのでは？

そんな人におすすめなのは『スクラッチアート』です。付属の専用のペンでなぞって削ることで、色鮮やかなイラストが浮かび上がる新しいぬり絵です。線をなぞるだけでなく、新しく描き足すこともでき、仕上がりは描き手次第なのが魅力のひとつ。なによりも簡単なので、小さなお子様からご年配の方まで幅広く楽しめます。新作はディズニープリンセスです。削ってキラキラ楽しいぬり絵にぜひ挑戦してみてください。(津)

見えない芸術と世界一周

美術館や博物館にも展示されず、そのままでは目にも見えない。でもとても美しいものがあることを誰でも知っていて、文化性も高い。

そんな、不思議な芸術品みたいに素敵なもの、なんだかご存知ですか？　そう、「ことば」です。

日本語ではとても一言で言い表せないような珍しい世界のことばをやさしく解説してくれる『なくなりそうなせかいの言葉』は、西淑氏の温かみのあるイメージイラストとも相まって、知らないことばなのにスラスラと頭に入ってきます。読み終える頃には、まるで世界を旅したかのような心地よい満足感と充実感。

RURUQ（ルルン）

しかし、ふと改めて表紙を見てみると、なんても切ない気持ちになってしまいます。この本に載せられている言葉はすべて「なくなりそうな世界のことば」なのです。

目に見えないこの芸術品たちが、本当に世の中からなくなってしまうのかどうかは、読者の私たちにかかっているのかもしれません。(酒)

忘れられた思想家 vol 5

今年は沖縄が我が國に返還されて、四五年である。

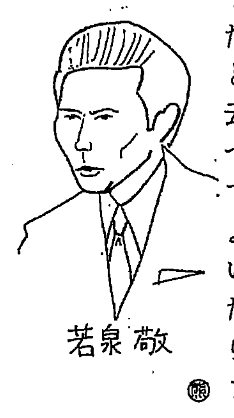
かつて佐藤榮作は「沖縄の祖國復歸が實現しない限り、日本の戰後は終はつたとは云へない」と演説し、沖縄返還に竝々ならぬ熱意を持つてゐた。それに應じ佐藤の密使として、返還交渉に携わつたのが、京都産業大學教授であつた若泉敬である。

若泉唯一の單著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（文藝春秋）によれば、一九六六年ごろから佐藤と接觸するやうになつた若泉は、翌六七年頃より、度々渡米し極祕交渉を擔ふ。若泉と會つたのはMorton Halperinであつた。Halperinは沖縄返還交渉の方針を決めた國家安全保障覺書一三號の起草者である。

「核拔き・本土竝み」の道筋が見えた六九年、Henry Kissingerは「緊急事態に際し、事前通告をもつて核兵器を再び持ち込む權利、および通過させる權利」を要求。若泉は「事前通告」を「事前協議」に改めさせ、三年後の沖縄返還が決定することになる。

返還が成つた後の若泉は、現實政治に關はらず學究生活に戻る。八〇年、東京から故郷・福井に移り、政界・論壇からも距離を置く。九四年、國立戰沒者墓苑で自裁しようとするも思ひとどまる。九六年、自宅にて逝去。公式には病死とされてゐるが、實際には青酸カリでの服毒自殺であつたと云ふ。若泉の生涯に就いては森田吉彦『評傳・若泉敬』（文春新書、絶版）、後藤乾一『「沖縄核密約」を背負つて』（岩波書店）が詳しい。

一學者に過ぎなかつた若泉を見出し沖縄返還を實現して見せた佐藤榮作と、佐藤の期待に應へKissingerとも渡り合つた若泉敬。どちらが缺けても現在の沖縄は存在しなかつたと云つてよいだらう。(熊)



若泉敬

【書誌情報】『不思議の国のアリス』(ルイス・キャロル、ロバート・サブダ・大日本絵画 4000円)『いらないねこ』(ヒグチユウコ・白泉社 1400円)
『大人のためのヒーリングスクラッチアート Disney Princess』(isotope・学研プラス 1500円)
『なくなりそうな世界のことば』(吉岡乾・創元社 1600円)

※価格は本体価格です。

平成29年11月5日

中田図書新聞

新刊・新譜・話題の本情報

来年も行きたい！

9/23・24に岐阜県の中津川で開催された「THE SOLAR BUDOKAN」という音楽フェスに行ってきました。ここ数年、8月は黒部のホットフィールド、9月は富山城址公園のビートラムを数少ない夏のイベントとして楽しみにしていたのですが、今年は残念ながらビートラムが中止のため、初めて中津川まで足を伸ばしてみたのでした。

SOLAR～の名のとおり、ライブ運営に関わるすべての電力が太陽光発電でまかなわれているそうで、富山・石川からも気軽に行けて（防寒対策は必要ですよ）、幅広い年代やジャンルの音楽が聞ける、かなりおススメのフェスでした。

お目当てのアーティストはもちろんどれも楽しかったのですが、それ以外にも、久々に聞いたGRAPEVINEが非常に良かったので、最新アルバム『ROADSIDE PROPHET』は是非とも聞いていただきたいところです。

そして、今年の個人的ハイライトは初日のトリを飾った吉川晃司のシンバルキック！足、ものすごく上がっていました。㊞

再始動求ム。

吉川晃司

近年、解散・引退と復活の波が押し寄せております。SMAPの引退の衝撃も抜けやらぬところに来年安室奈美恵さんが引退することは耳にされた方も多いのではないでしょうか？一時代を築いたアーティストが音楽業界からいなくなるというのはなんとも言えぬ寂しさがあるものです。そんな中でハイスタやイエモンなどのようにバンド復活をしてくれたりも最近増えてきております。自分の若い時代の中に残る懐かしい声や名前を聴くと、一緒に昔のことも思い出し、なんだか気持ちがほころびます。それが特段ファンと言うわけではなくとも。音楽とともに過去を思い出す。それだけ音楽と言うものは人生に根付いており、そういう時音楽とまたアーティストの凄さを感じます。今後も復活アーティストを期待したいです。㊐

将棋のわかる人ほどオドロク結末!!

藤井四段の活躍で将棋ブームになっている。私も小中学生の時はよく指していたが、いつの頃からか指さなくなってしまった。それでも、日曜午前のテレビのNHK杯や北國新聞棋王戦の記事をたまに見ると夢中になることもある。そんな私なので、将棋関連のミステリーである『盤上の向日葵』を見た瞬間に読もうと決めた。

冒頭は殺人の容疑者である天才棋士と壬生六冠が竜昇戦（それぞれ羽生二冠、竜王戦がモデルと思われる）の第七局の対局シーン。そこからある銘駒を中心に過去と現在の話が交互に進み、真実が明らかになっていく。

将棋を知らない方に伝わりづらいことが残念ではあるが、この物語で一番の衝撃は第七局の結末である。将棋が好きな方にはぜひ、好き故に味わえる衝撃を受けて欲しい。㊇

上品でチャーミングな知の巨人

昨年秋に柏崎市で開催された講演会に出掛け、ドナルド・キーン氏本人を目にすることができた。御歳95歳。はじけるような笑顔は華やかで、大きな碧い眼はキラキラと輝いており、未だ瑞々しい印象を放っていた。

キーン氏といえば、日本文学研究の世界的第一人者だが、伝統芸能をはじめとする日本文化全般にも深い造詣をもつ。巨大な学識と経験に立脚した分かりやすい作品解説によって、はじめて能や文楽、狂言の魅力を知った人も多いと思う。オペラやクラシック音楽との比較論も痛快で大変興味深く、著作を読んでいると探究心の枝葉が無限に伸びていくように感じる。

『別冊太陽 ドナルド・キーン』はキーン氏の膨大な功績を辿る上でとても便利なガイドブックである。尽きること無い知的欲求とエネルギーに圧倒されつつも、大きな日本愛を感じて温かい気持ちになる。㊗

ドナルド・キーン

【お知らせ】

・掛尾本店フェア情報

「カズオ・イシグロ」

「新潮クレスト ブックスフェア」

「ポピュラー・サイエンスの愉しみ」

etc.

・twitterやってます。

掛尾本店 @nakadahonten

コミックラボ @tomi_labo

ファボーレ店 @nakadafavore

魚津店 @nakadauozu

イオンかほく店 @nakadakahoku

小松大領店 @BooksDairyo

【編集後記】

今号に二回登場した作家、原田マハさんの最新作『たゆたえども沈まず』は、日本人画商・林忠正と画家・ゴッホの出会いを描いた小説。この林忠正はなんと富山県高岡市出身。日本の美術品をパリに広め、印象派に影響を与えた画商です。興味が湧いた方は、ぜひお近くのブックスなかだでお買い求めください！

【書誌・CD情報】『ROADSIDE PROPHET』（GRAPEVINE・ビクター・3000円）
『盤上の向日葵』（柚月裕子・中央公論新社 1800円）『別冊太陽 ドナルド・キーン』（平凡社 2400円）
『たゆたえども沈まず』（原田マハ・幻冬舎 1600円）
※価格は本体価格です